©錦城高校新聞委員会編集室 2021
錦城高校新聞 ２０２１年（令和３年）９月２日（木曜日）

錦城高校新聞

題字　井口　文章

再刊　第３６６号

印刷・発行

錦城高等学校新聞委員会
編集室 2021

みんなでつくる
錦城高校新聞

一面：４つの部活が全国大会へ出場しました！
漢検で錦城が団体優秀賞を受賞
二面：第45回全国高等学校総合文化祭
新聞部門の様子を特集します！

前進したその先に見えるのは

新聞・将棋・文芸・映研 全国大会出場

新型コロナウイルスが流行している中、４つの委員会・部活動が全国大会に出場し、好成績を収めた。今号では、出場した錦城生の熱い思いや全国大会の様子を取材する。

（編集部共同取材）

総文祭新聞部門の交流会での取材の様子

新聞委員会〈全国ベスト12〉

８月４日（水）から６日（金）まで、和歌山県の開智高校にて第45回全国高等学校総合文化祭新聞部門が開催され、編集委員５名が参加した。

開会式では年間紙面審査賞で最優秀賞５校、優秀賞７校に選ばれた高校が表彰され、錦城高校新聞も４年連続で優秀賞（全国ベスト12に相当）を受賞した。

大会は３日間に渡って開催された。主な活動として、全国から各都道府県の代表として集まった高校生が40班に分かれて行った和歌山県の名所や特産物の取材。取材は、観音山フルーツガーデンや和歌山城などの様々な場所で行われた。今回は裏面にて、計８コースの中から５コースを取り上げる。この３日間で全国の高校生から学んだ他校の紙面づくりのコツや技術を今後の新聞製作に活かしていきたい。

将棋部〈全国大会出場〉

７月31日（土）、８月１日（日）に行われた第45回全国高等学校総合文化祭将棋部門に小沼紗弥さん（２F）、平澤響さん（２M）が出場した。そのうち、平澤さんに今回の総文祭について取材した。平澤さんは「結果は全敗だったものの、良い経験になりました」と話す。やはり総文祭の出場者は強いと感じたそうだ。対局についても「いつも特定の人としか対局していないのですが、今回はそれとは違う色々な戦法をみることができました」と語る。試合以外でも、ホテルで相部屋になった埼玉県代表の生徒に将棋の戦法について教えてもらうなど、たくさんの貴重な経験をしたそうだ。

大会は万全の感染対策の下で行われた。当日は会場に着いてからまず体温を測り、第１試合の席で待機。その後、大会の説明がなされた後で試合が始まり、４試合をこなして終わった人から自然解散という流れだったそうだ。

平澤さんは「今回の４試合は、相手を攻めきれずに自陣の守りを崩されて終わってしまうことが多くありました」と試合での反省点を分析する。また、今後に向けて、その反省も活かし「序盤から中盤にかけての力をつけていきたいです。また、どう対応すればいいのか分からない戦法の人と今回対局したので、それに応戦できるようにさらにこれから戦法の知識を増やしていきたいです」と、具体的な目標を立てつつ臨むと語った。

文芸部〈全国大会出場〉

８月１日（日）から５日（木）までの５日間に渡り、第45回全国高等学校総合文化祭文芸部門が検温や消毒などの万全の感染対策の下で開催。錦城からは文芸部代表として元部長の濱田真帆さん（３K）が出場した。

他校の文芸部員と意見交換

文芸部門では、初日に「文学散歩」という企画で、歌舞伎や能の物語にも描かれる安珍と清姫に縁のある道成寺を訪れ、２日目は全体交流会と部門別交流会が行われた。全体交流会では和歌山県についての○×クイズが行われ、部門別交流会では芸術の先生を招いて水彩画を描き、他校の作品を鑑賞したそうだ。交流会を通じて濱田さんは「ほとんどの高校が製本を業者に依頼していて、自家製本している高校がほとんどないことに驚きました。また、他校の部誌と自分たちの部誌を比較して自分たちの部誌の良さを改めて確認することができました」と笑顔で話す。最終日には小説家の高橋源一郎先生による「書くってどうゆうこと？」という講演会が開催された。その講演会では、今後の活動において役立つ話をたくさん聞くことができたそうだ。

来年の総文祭に向けて濱田さんは「今回の総文祭で学んだことを後輩たちに伝えて次に繋げていきたいです」と語る。そして「願わくは文芸部の部誌である『天舞』がずっと続いてほしいです」と胸の内を明かした。

最後に文芸部の後輩に向け「プレッシャーなどに囚われず、やりたいように自由にのびのびと活動してほしいです」とメッセージを送った。

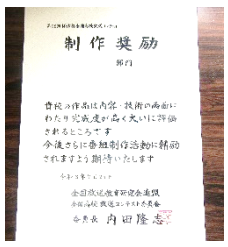
映画研究部〈全国ベスト40〉

映画研究部が制作したドキュメント作品『桜か、森か』が第68回ＮＨＫ杯全国高校放送コンテストテレビドキュメント部門において、奨励賞（全国ベスト40相当）を受賞した。今回は作品制作に携わった３年生部長の齋藤天音さん（３K）を取材した。

制作奨励賞受賞を受け、齋藤さんは「ここまで進出できるとは思っていなかったので嬉しい気持ちもありますが、驚きの方が強かったです」と率直な思いを語る。また、錦城と同じ全国ベスト40、さらにはそれより良い成績を収めた学校の作品が気になったそうで、受験が落ち着いてから観てみたいという。

今後の映画研究部を担う後輩たちに向けては「大会で賞をとることも大事ですが、高校生の今しか表現できない感情があると思うので『高校生の時に作る映画』を楽しんでほしいです」と呼びかけた。

そして、今後の映画研究部の活動について、２年生部長の家納陽祐さん（２E）に取材した。現在は１・２年生で、錦城祭で上映する作品の制作を行っている。家納さんは「自分たちの作品を楽しんでもらえると嬉しいです」と話す。また、秋に行われる全国高等学校総合文化祭に出品する作品制作も行っているが、元々作っていた作品があまり上手くいかず、１から撮影し直すなど試行錯誤を行っているそうだ。「次の大会が来年のＮコンに向けての中間ポイントになるので、ここで良い成績を残し、良いスタートを切りたいです」と意気込んだ。



制作奨励賞の賞状

錦城、漢検で優秀成績

合格率の高さを表彰

錦城が漢字能力検定協会から最優秀団体賞を受賞した。

賞状が職員室入口に飾られている

この賞は令和２年度の漢字検定において、生徒の合格率の高さを賞したものだ。受賞を受け、国語科の田代直之先生は「このような賞があることを知らなかったので、正直驚きました」と話した。

昨年度は第１回の検定において、受検者が史上最多だったという。「母数が大きいだけでは取れない賞なので、休校期間中に生徒がしっかり勉強したことが形となったと思います」と田代先生。賞状と盾は職員室に飾ってあるが、田代先生は「受検したみんなの賞です」と繰り返し、生徒の努力を称えた。国語の定期試験で出題される漢字は２級のものまであるので、ここで頑張れば検定にも通ずる力がつくという。最後に、今後の受検生に向けて「検定は外部でも使えて、周りに誇れるものなので、年３回のモチベーションとして頑張ってほしいです」と締めくくった。

受賞を受けて生徒は

昨年度の第１回漢字検定で準２級を受検し、合格したＡさん（２年）は「学校全体の受賞ですが、その一員になることができてとても喜ばしいです」と話す。第３回漢字検定で２級を受検し、合格したＢさん（２年）は「錦城生が頑張った証として貰えた賞なので、とても良いものだと思います」と語った。（抹・甘）

より清潔な学校環境へ

７月後半から２号棟・グラウンド・第１体育館の計 42 カ所のトイレの改修工事が行われ、夏休みに完成した。改修後のトイレは白く、清潔感抜群で誰もが使いたくなるようなトイレに生まれ変わった。また、２号棟と体育館のトイレには、向かって左側にリモコンが付いており（グラウンドのトイレは除く）、新校舎のトイレと比べてリモコンの機能が充実しており、シャワーがとても温かい。シャワーの強さは５段階から選択可能だ。

今回のトイレ改修工事について事務の方々に話を聞いた。改修工事の理由の１つに、学校説明会のアンケート等で「私立学校なので洋式を取り入れてほしい」と言う意見もあったことを挙げる。また、工事は連続した日数が必要となるので、トイレの設置工事は夏休みに行ったという。トイレ工事で一番重点を置いたのは、ウォシュレットの設置で、事務の方が時代のニーズに対応できるようにと考案したそうだ。今回の工事を通してのトイレの使い方について事務の方々は「次に使用する方が気持ちよく使えるように、日頃から綺麗に使うことを心がけてほしいです」と呼びかけた。

実際にトイレを使用したＡさん（１年女子）は「便座がとても温かくて、ずっと座っていたくなります」と語る。Ｂさん（２年女子）「今までは洋式待ちする人の列ができているのを何度か見かけたのでそれが解消されて効率が良くなると思います」と話した。（歩）

綺麗にトイレを使用しよう

大会報告

映画研究部
７月29日（木）
▽第68回ＮＨＫ杯全国高校放送コンテストテレビドキュメント部門　制作奨励賞

卓球部
８月３日（火）・４日（水）
▽多摩地区大会６回戦敗退
ベスト32　落合翔陽（１I）　広中智亮（１K）

８月15日（日）
▽私学大会団体Ｂチーム　２回戦敗退

新聞委員会
８月５日（金）
▽第45回全国高等学校総合文化祭　優秀賞

吹奏楽部
８月10日（火）
▽第61回東京都高等学校吹奏楽コンクール　銅賞

ソフトボール部
８月22日（日）
▽小平市民大会　準優勝

フットサル部
８月25日（水）・26日（木）
▽夏の高校生フットサル大会
Ａチーム　６位
Ｂチーム　８位

サッカー部
８月29日（日）
▽第100回全国高校サッカー選手権東京都予選２回戦対武蔵野大学高校　勝ち

生徒会動静

７．２０～９．１

特になし

むらさき草

１年前の夏、東京都の１日の新型コロナウイルスの新規感染者数は１００人ほどだった。それでもウイルスに対して恐怖心を抱き、夏休み明けに学校に行くことさえ怖かった。しかし、昨年末から東京都の１日の新規感染者数が１０００人を超える日が増えてきても、いつの間にか、その状況に慣れて学校に行くことも当たり前になり、感染対策がおろそかになっていた気がする▼この夏休みは楽しみにしていた大きなイベントがあった。全国高等学校総合文化祭だ。これは「文化部のインターハイ」と呼ばれる大会で、今年は和歌山県で開催された▼錦城高校新聞委員会の一員として参加してきたが、人の多い東京駅から新幹線に乗らなければならなかったり、会場で他県からきた学生と交流したりするなど、コロナに感染するリスクのある状況がやはり多かったと思う▼実は、私の祖母には基礎疾患がある。そのためコロナにかからないよう万全の対策をしなければならず、大会出発前から両親や祖母に「コロナにならないように」と何度も何度も言われた▼これが自分のコロナ対策を見直すきっかけになった。だから和歌山では、飲食をする前に必ず手指消毒をしたり、外に持ち出したものの消毒をより徹底したりして大会に参加していた。大会自体も、オンラインで会場同士をつなぐなど、例年にない緊張感をもって開催され、無事終えることができた▼振り返ってみると、１学期の終わりくらいには、校内でも鼻マスクの人や飲食時に黙食を徹底できてない人もいた。最近は東京都の１日の新規感染者数が４０００人を超えることも珍しくなくなり、デルタ株も広がっているといわれている。自分のためにだけでなく、周りに移さないためにも、今一度、自分の感染対策を見直すべきだ。（烏）

総文祭特集

紀州で新聞づくりを学ぶ

わかやま総文新聞部門

8月4日(水)から8月6日(金)にかけて和歌山県の開智高校で行われた全国高等学校総合文化祭新聞部門に錦城高校新聞委員会編集部が参加した。総文祭で行われた交流会や研修取材の様子を紹介する。（編集部共同取材）

制限下での交流会

会場到着後は、それぞれが班ごとに割り振られた教室に行き、生徒交流会が行われた。例年は参加者が1つの場所に集まって行われるが、新型コロナウイルス感染予防のため、今年は各教室で自分の班の中で自己紹介をし、その後は和歌山県の紹介ビデオを視聴する形がとられた。本部と各教室は、Ｚｏｏｍを使用して連携をとっていた。

稲むらの火の館（左上）、中野BC(左下)、 観音山フルーツパーラーでの取材活動の様子(右上)、玉津島神社での講演の様子(右下)

和歌山各地へ取材

交流会では他校の生徒と交流新聞を作成するため、8月4日(木)の午後は、班別に和歌山県各地に赴き、取材活動を行った。今回は、指定された全8コースのうち、編集委員が参加した5コースの取材の様子を紹介する。

1　フルーツコース

フルーツの生産が盛んな紀の川市で取材をした。最初に訪れたのは「観音山フルーツガーデン」。次に、定年退職後に農業を始めたという神徳泰孝さんが経営する「神徳農園」を訪問。ひとり農業を模索しており、その工夫や悩みを取材した。最後に「ＪＡ紀の里ファーマーズマーケットめっけもん広場」へ。安価であることと食材の安全性を重視して農作物を提供している。

農業従事者が減少している今、取材を通して、新たな農業の魅力について知ることができた。

2　和歌山城コース

和歌山城は徳川家康の十男にして、紀伊和歌山藩初代藩主である徳川頼宣の城。木々の中に佇む姿が何とも言えない荘厳な空気感を醸し出していた。また、この城は過去に何度も復元工事を行っている。なかでも城の西之丸に隣接している御箸廊下という橋は、日本古来の高級な木材を使用しているという。そのため、復元に2億円もの費用がかかっており、力の入りようが窺えた。現在城跡として残っているのは最盛期の4分の1ほどの面積しかない。この他にも、近くにあった和歌山県立博物館にも立ち寄り、和歌山の歴史の流れを体で感じることができた。時の権力者しか味わえなかった天守からの眺望は一見の価値あり。和歌山に訪れた際は是非とも行くことをお勧めする。

歴史ある和歌山城

3　和歌浦コース

絶景の宝庫として知られている和歌浦。初めに、玉津島神社で源氏物語や万葉集と和歌の浦について、近畿大学附属和歌山高等学校教諭の金田圭弘先生の講義を受けた。この神社の裏にある貴供（てんぐ）山からの眺めは聖武天皇も感動したといわれる絶景であり、和歌浦を一望できる。

その後は万葉館へ移動し自由に取材。中でも万葉シアターでは、かつて聖武天皇と共に和歌浦へ訪れた山部赤人が語り手の映像上映を行っており、ここでは歴史ある万葉の世界を体感することができた。最後に新和歌浦漁港でシラス漁について話を聞き、現在の漁業や今後の取り組みについて知ることができた。

自然あふれる
貴供山の登山道

4　伝統産業コース

和歌山の伝統産業の要地である海南市。まず向かったのは名産の紀州南高梅を使った梅酒醸造の第一線をゆく「中野ＢＣ」。ここでは製品の海外輸出も行っている。酒蔵見学やビデオ視聴の後、日本庭園のある長久邸にて代表取締役社長の中野幸治さんら重役4人への取材を行った。

続いて訪れたのは、日本四大漆器の一つである紀州漆器の里「黒江」。最初に「うるわし館」にて、語り部の方による紀州漆器の歴史や製造過程についての説明を受けた後、実物を見学した。次に、黒江の町並みを散策。「のこぎり歯状の家並み」では、紀州連子格子や漆喰、切り妻を使用した家屋の数々が町の歴史を感じさせていた。

「うるわし館」にある
紀州漆器、黒江塗の実物

5　稲むらの火と湯浅コース

津波に関する「稲むらの火」という逸話が有名である広川町の「稲むらの火の館」と、醤油の発祥地とも知られる湯浅を訪れた。「稲むらの火の館」では館内を見学したあと3Ｄ映像を視聴。「稲むらの火の館」の職員である高城桜子さんは「津波に関心を向けて、命を守るための行動をとってほしいです」と話した。

その後湯浅醤油の老舗である「角長」へ。ここには醤油資料館もあり、醤油づくりについてジオラマやビデオで紹介されていた。次に銭湯跡歴史資料館「甚風呂」を取材。ここでは明治から昭和期にかけて使用されていた古民具を中心に展示している展示室をはじめ、番台や浴室などが当時の雰囲気を醸し出していた。

「稲むらの火の館」で
展示されているジオラマ

＊＊＊

3日間の総文祭を終えて、全国の新聞部、新聞局、新聞委員会の生徒からたくさんのことを学ぶことができた。8月7日(土)に行った「観音山フルーツパーラー」での取材の様子は今後発行する号でお届けする。

バトンは東京へ

来年度の総文祭は東京開催

和歌山から東京へ

8月6日(金)、開智高校開智ホールにて、わかやま総文の新聞部門閉会式が行われた。式内で次年度開催地代表として挨拶をしたのは、とうきょう総文新聞部門生徒実行委員長を務める錦城の藤生穂乃花さん(2E)。最初に「このような状況の中、わかやま総文を開催していただき誠にありがとうございます」と感謝の気持ちを述べ「来年東京で皆さんのことをお待ちしています」と話した。その後、和歌山県と東京都の大会Tシャツを交換。総文祭のバトンは東京都へ引き継がれ、3日間に及んだ新聞部門の大会は終了した。

開催地引き継ぎ式の様子
都立駒場高校の生徒も参加した

わかやま総文新聞部門生徒実行委員長の和歌山県立向陽高等学校3年の仲宗根恵菜さんを取材した。実行委員として仕事をしてみて、忙しいけど楽しいと話した。「結果として自分たちが楽しくなかったら意味がないと思います。来年も実行委員は忙しいと思うけど楽しんでください」とエールを送った。

大会成功のために

来年の全国高等学校総合文化祭は東京都で開催される。これに伴って、錦城高校新聞委員会編集部は、とうきょう総文新聞部門の生徒実行委員を務める。

生徒実行委員長を務める藤生穂乃花さん(2E)は「実行委員みんなと、全国から来ていただく方々を引っ張って行くために、自分で考えて行動していきたいです」と話す。また、生徒副委員長の皆川大和さん(2M)は「生徒実行委員全員で協力して、最高のとうきょう総文を創れるように、後悔のないように最後まで全力で頑張ります」と語る。同じく生徒副委員長の福士誠吾さん(2M)は「1年経ったとうきょう総文でもコロナ禍での開催をやむを得ない場合があるかもしれませんが、各地からお越しになる方々の財産となるような総文祭を創り上げていきたいと思います」と意気込んだ。わかやま総文から学んだことを活かし、来年度行われるとうきょう総文を生徒実行委員一丸となって協力し、成功させたい。（紅・麦）

各校の個性あふれる新聞展示

8月3日（火）から6日（土）の全国総合文化祭新聞部門が開催されている間、会場の開智高校では参加校が提出した模造紙が展示されていた。

各校が行った取材や発行した紙面を模造紙で紹介・アピールし、それを見て感じたことを付箋に書いて模造紙近くの欄に貼ることで間接的に意見交換ができる。各校の模造紙を見て錦城高校新聞の長所や新しく取り入れるべきテーマ、改善点を知る良い機会となった。（烏）

東京都代表校の展示の様子
日々の活動、紙面を模造紙にまとめている

海の上で非日常を体験

大会閉会後は研修取材へ

わかやま総文の閉会式終了後、「和歌山マリーナシティ」の研修取材に参加した。この施設は、和歌浦に浮かぶ人工島で、海を眺められる温泉、釣り施設やヨーロッパの街並みが広がるテーマパークが充実している。「非日常」を肌で感じられる広々としたエリア内で遊びつくしてみよう。

釣りを手軽に体験

釣りを手軽に満喫することができる海釣り公園・海洋釣り堀。ここでは海を泳ぐ自然の魚を相手とする海釣り公園と区切られた範囲に魚を放流する海洋釣り堀の2つの施設に分かれている。今回は海洋釣り堀を中心に取材し、有限会社喜栄丸水産代表取締役の芝克也さんに話を伺った。

この釣り堀ではマダイを中心にメジロやカンパチ、サバなどの多様な魚が釣れる。芝さん。初心者からベテランすることが一番大切です」との着用と検温を義務付けています」と話した。（抹・桜）

海洋釣り堀での
取材の様子

さんは「広いので投げ釣りができるところは他にはない特徴だと思います」と魅力を語った。

本来であれば他府県からの来客も多いそうだが、コロナの影響で閉鎖を余儀なくされた時期もあり、客足は減っている。しかし、コロナ対策は万全で、入場制限や休憩室の利用中止、釣り竿のアルコール消毒や日光消毒などを徹底して行っている。

「釣る方は遊びでやっていますが、釣られる方は命がけだということを考えて釣りをし、職員の方は「アトラクションに乗る前後に手指消毒をすること、3歳以上にはマスク

西洋の街並みを愉しむ

ポルトヨーロッパエリア和歌山に立ち寄った時には再度訪れてみたい。

和歌山グルメ録!!

和歌山を代表するグルメである和歌山ラーメン。8月4日(水)の昼食は和歌山ラーメンの総本山といわれている「井出商店」でいただいた。この店の看板メニューは「中華そば」。和歌山ラーメンには様々な味が存在するが、この店では「井出系」と呼ばれる豚骨醤油スープを使用している。ネギが効いていて深みのある味で、ストレートの細麺が濃厚な豚骨醤油スープによく絡んで食べ応えがあった。和歌山に訪れた際にはぜひ食べてみてほしい。

また、7月20日(火)から8月6日(金)にかけて、近畿地方のローソンにて、わかやま総文コラボ商品が発売された。全4品のうち、今回は「和歌山うまいもんおにぎりセット」と「とろ生食感のチーズケーキ（和歌山県産温州みかんの果汁入りソース）」を実食した。おにぎりセットはボリュームたっぷりで、「紀の国みかんどり」や「紀州南高梅」を使用している。チーズケーキは口に入れた瞬間甘酸っぱさが口いっぱいに広がり、しつこくない甘さで美味しくいただくことができた。（麦）

井出商店の中華そば(上)と
わかやま総文コラボ商品(下)